

白い斑紋を持った

黒猫キキの物語

陶 易 王



「お祖母ちゃん！ ボク、猫を飼ってもいい？」

「駄目ですよ。誰が面倒見るんですか。食べ物をやらねばならないし、家の中を汚したら綺麗にお掃除しなければいけないし、お父さんとお母さんがいなくなってお祖母ちゃんはお前の食事まで作らねばならない。猫には手が届かないよ」

「あの猫ね。縁の下で生まれたのか、それとも捨てられたのか、お父さんが死んだ日に、床下から這い出て、おなか空かして、にやーにやー鳴いていたんだ。遭難したお父さんは、海の上を何日も漂って、お腹を空かしたろうね。お皿にミルクをいれてやったら、ぺちやぺちやとすぐ飲んだよ。可哀そうだろう。ボクが面倒見るから飼ってもいいね？」

「お前がすっかり世話するのなら、いいだろう。お父さんは海で遭難行方しれずになって帰ってこない。お母さんは病気で中々退院できそうも無い。猫はお前が可愛がつてやりなさい。家にはまだ鼠も居るらしい。子猫じゃうまく捕れないかもしれないけどね」

ジローは納戸の脇に箱を置いて、中に襦袢布を敷いて寢床を作った。

名前をキキとつけられた黒猫は家の中で大人しく、少しずつ大きくなった。

「お祖母ちゃん！ キキが鼠を捕ったよ、ほら。それからこの猫ね。全身真っ黒なのに喉から胸にかけて白い斑紋があるんだ。おかしいね。どうしてかしら。」

「それはね、お話してあげよう。昔ドイツに怠け者のハンスという若者がいたそう。怠け者で何にも働かない。食べ物もお母さんが食べさせてやった。ある時、お母さんが隣村に出かけるので7日間、留守をした。その間お腹がすくと思つて、パンを7個焼き、それを首の周りに結びつけたのじゃ。一日に1個パンを食べて首をぐるりと回せばいい。ところが、母さんが帰ってくると、ハンスは飢え死にしていた。口の前のパンは食べたが横のパンは回すのが面倒で回さなかったの。飢え死にしたそう。死んでハンスの魂は天国に行った。そして神様の前で自分は働くのが嫌で、飢え死にしたと言つた。呆れた神様は、猫に生まれ変わったら、いいと按配して下さった。その猫は真っ黒で、喉から胸にかけて白い斑紋がある。暗闇で鼠が黒い猫を見ると、白い斑紋をチーズかパンと間違えて飛びついて来ると言うわけじゃ。キキは物臭さハンスの子孫かもしれないね」